

ラトナムニ・ヴァジュラーチャールヤガラサで 書写したネワール仏教写本

吉 崎 一 美

カトマンズ市内の私立古文書館アーシャー・サフー・クティは 5300 点を超える写本を所有し、それらをすべてデジタル画像で公開している (The Asha Archives, Kathmandu, Nepal & The Buddhist Library, Nagoya, Japan., *Nepalese Manuscripts Digitalization Project 1996-1998.*, Kathmandu, 2001). その検索には二つのフル・カタログがある (Yoshizaki Kazumi ed., *A Catalogue of the Sanskrit and Newari Manuscripts in The Asha Archives [Asha Saphu Kuthi]*, Cwasa Pasa, Kathmandu, Nepal., Kurokami Library, Kumamoto, Japan., 1991. および Yoshizaki Kazumi ed., 同題 *Part II.*, Kurokami Library, 2002 : 後者は 1991 年以後に収集された写本のカタログである). アーシャー・サフー・クティも独自に二つのカタログを発行している. しかし Janak Lāl Vaidya and Prem Bahādur Kāṃsakār eds., *A Descriptive Catalogue of Selected Manuscripts Preserved at The Āśā Saphū Kuthi, Āśā Archives*, Kathmandu, 1991 は約 500 点の写本を紹介するにとどまる. また Rājā Śākya ed., *A Short Catalogue of Āśā Archives*, Kathmandu, 2000 はデジタル画像ナンバーによって編纂されているが, それらのカタログはいずれも本格的なネワール仏教研究に不可欠なマイナー・テキストの検索に適していない.

筆者はこれらアーシャー・サフー・クティ所蔵写本のカタログ作りを進めるうちに, これらの中に, 奥書にチベットでの書写を明記する写本が 39 点あることを確認した (拙稿 “The Modern Newari Buddhist Manuscripts copied in Tibet : from the Collection of Asha Saphu Kuthi, Kathmandu, Nepal”, 未発表). これは, かなりの数におよぶ良質な近世のネワール仏教写本が, チベットに滞在するネワール人たちによって実際にチベットの地で書写されたであろうことを意味している. また私たちは, チベットでの経済活動で得られた財力によって, さらに多数の写本が彼らの帰国後にカトマンズ盆地で書写された可能性を考えなければならない. チベットに在住した近世ネワールの交易商人たちは, しばしばチベット様式の仏画を制作して, そこにチベットでの成功を記念するネワール語の銘文を書き記した. そこには, 絵画を通じて最新のチベット文化を取り入れようとする進取の意欲が認められる

(140) ラトナムニ・ヴァジュラーチャールヤがラサで書写したネワール仏教写本 (吉 崎)

(拙稿「ネワール語銘文を持つチベット仏教絵画について」『密教文化』第213号2004)、その一方で、チベットで活躍するネワール人たちは、商人や職人などとしての本来の活動の合間に、いくつもの良質なネワール仏教系写本を書写し、そこにネワール語の奥書を書き添えた。こうした行為には、たとえ異国の地にあっても「自分たちの」文化を護持しようとする強い姿勢が読み取れる。

これらチベットで書写された写本の中に、カトマンズ旧王宮ハヌマン・ドカに隣接するシカム・バハ Sikhamu Bahā (タルムーラ・マハーヴィハーラ Tarumūla Mahāvīhāra) のヴァジュラーチャールヤであったラトナムニ Ratnamuni Vajrācārya が書写した、いくつかの写本がある。以下では、前掲未発表の拙稿にしたがって写本データを提示する。写本タイトルの後に示した四桁の数字は、前者が吉崎カタログ1991でのランニング・ナンバー、後者DPはデジタル画像化作業に際して新たに付したランニング・ナンバーである。デジタル画像はそのどちらのナンバーからも検索が可能である。また紙数の制約から、本稿では先の未発表論文に収録していない奥書の原文のみを提示する。またその和訳は大意のみとする。なおネワール語の綴りはしばしば同一人物でも統一されておらず、本稿に示した奥書にもそうした綴りの不統一が認められる。

ラトナムニの生没年などの詳細は不明である。それでもこれらの奥書を年代順につなぎ合わせると、彼の生涯のおおよそが垣間見えてくる。彼の生涯は、大きく二つの時期に分けられる。その前半生で、彼はカトマンズ市内の有力な仏教寺院(ムーラ・バハ)の一つであるシカム・バハに属する司祭僧であったが、後半生にはラサでチベット交易のビジネスに参加した。そしてそのいずれもの時期の折々に、彼はネワール仏教写本を書写したのであった。

〈カトマンズ時代に書写した写本〉

① [1] Satpūjā vidhi [2] Aṣṭamaṅgala gāthā (0261 = DP 2358) Nwa. - Nwl. 19.3 × 8.0cm Paper TS. H. on a & b. pp.22, complete 5 lines Fig. of hastamudrā on p.22 colophon : iti satpūjāvīdhī samāpta // likhitaṃ kāṣṭhamāṇḍapa tadamūla mahāvīhāla pāko grīha sthāna latnamūnīnaṃ thaota dayakā jula śubhaṃ // samvat 983 mti kārttika thva 13 sa coyā jula śubhaṃ // 「カシユタマダパのタダムーラ・マハヴィハーラの、パコ(正式にはパコ・プクリ・ディヤーマといい、現在のニューロードから南側一帯のエリアにあたる)の家に住むラトナムニが、自分のために作った。ネワール暦983年カールティカ月白分第13日に書写した」。

② Svayambhū purāṇa (0712 = DP 5137) Skt. Nwa. - Nwl. 40.0 × 12.5cm Paper H. on b.

ラトナムニ・ヴァジュラーチャールヤがラサで書写したネワール仏教写本（吉 崎）（141）

ff.216 (1b-216b, complete) 7 lines Takaoka CH 514 colophon : iti śrī 3 svayambhū-purāna dharm-madhātu svayamutpatti dharmmamahātmya subhāṣita sūtra daśamo[']dhyāya samāptaḥ // ye dharm-mā [i]tyādi // yadi śuddham vā m(!)asuddham vā leṣako doṣa nāsti śubham // // samvat 991 mti māghamāsye śukrapakṣa dasamiyām pūrṇatithau rohininakṣatre aindriyoge jathākaraṇnamuhastare maṃgalavārasare makarārāsigate bhāskare vṛṣarāsigate candramasi // etat dine likhitaṃ madu śikhaṃmugu vāhālayā pāko layamṭākṣayā śrī vaj[r]ācāryya ratnamuninaṃ coyā saṃpūrṇa sidhaya-kā julo śubha bhūyāt // 「ネワール暦 991 年マーズ月、この日にマドウ（マル・トール）のシカムグ・バハラの、パコのライエンターチェ（地名または特定の家を意味する）のヴァジュラーチャールヤであるラトナムニが書写した」。

〈ラサ時代に書写した写本〉（③、⑤～⑨の奥書原文は前掲未発表拙稿に提示する）

③ Svayambhūtpatti satkāthā (or Svayambhū samutpatti kathā) (DP 2629) Nwa. - Nwl. 30.0 × 10.5 cm Paper H. ff.152 (f.2 ~163, missing f.1, 23~28, 33 and 34) + 1 folio 6 lines 「ネワール暦 1001 年マールガシーラ月、この日にネパールのカシュタマンダパのタラムーラ・マハーヴィハラの、パコ・プクリ・ディヤーマの東の家に住む、吉祥なるヴァジュラデーヴィーの足もとの蓮華（を礼拝する）、ヴァジュラーチャールヤのラトナムニという比丘が、北方ラサのルブーシャーカ・パーラーの家で種々の商いをしていた時に発心して、この吉祥なること三度のスヴァヤンブー・プラーナの物語をネワール語で記した」。

④ Pañcarakṣā dhāraṇī (4653 = DP 3258) Skt. - Nwl. 16.0 × 7.8cm Indigo paper ff.37 (1b-37b, complete) 5 lines colophon : āryya mahāmantrānusāraṇī vidyārājñī samāptaḥ // // ye dharmā [i]tyādi // yadi śuddham vā ~ // śloṣtu (!) samvat 1004 mti jyēṣṭha kṛṣṇayā 9 sa likhitaṃ nēpāla śikhaṃmugu vāhālayā śrī vaj[r]ācāryya ratnamuninaṃ likhāpitā dīna jula śubham // 「ネワール暦 1004 年ジェーシュタ月に、ネパールのシカヌムグ・バハラのヴァジュラーチャールヤであるラトナムニが書写した」。

⑤ Bauddha stotra saṃgraha (63 stotras) (DP 2843) Skt. - Dng. 24.5 × 19.0cm Paper Bound book H. pp.98 (90 + 8) 15 lines 「ネワール暦 1008 年ジェーシュタ月に、ネパール・マンダラのカシュタマンダパ・マハーナガラ、タラムーラ・マハーヴィハラの、パコ・プクリ・デョーマの東の家に住む、吉祥なるヴァジュラデーヴィーの信奉者である、ヴァジュラーチャールヤのラトナムニが書写して完成した。ネパール・マンダラのカーンティプル・マハーナガラ、ケーシャチャンドラ・パーラーヴァタ・マハーヴィハラのシャーキャ比丘である が、北方ラサのタルンシャーカ・パーラーに滞在して種々の品を商っていた時に発心して、このストトラを書写させた」。

⑥ Nāgarājasya aṣṭāṅga pranāma nāma dhāraṇī (DP 2570) Skt. - Nwl. 18.5 × 6.5cm Paper H. ff.11 (complete) 5 lines 「ネワール暦 1008 年ナシュタ・チャイトラ月に、カシュタマンダパ

(142) ラトナムニ・ヴァジュラーチャールヤがラサで書写したネワール仏教写本 (吉 崎)

のタラムーラ・マハーヴィハーラの、パコ・プクリ・デョーマのヴァジュラーチャールヤであるラトナムニが書写した。ネパール・マンダラのカンティプル・マハーナガラ
の、ラサの地のクン・パーラーにおいて種々の商売をしていた、タムラカルであるジュ
ニャーナサーガラが発心して施主になり、この吉祥なること三度のナーガラージャ八肢
敬礼の書を書写させた」。

⑦ *Vajravārāhi kalpa mahātantrārāja* (4293 = DP 3934) Skt. - Nwl. 28.5 × 11.0cm Paper H. on b. ff. 236 (1b ~ 236b, complete) 7 lines Fig. on 1b Takaoka DH 404 「ネワール暦 1010 年シュラ
ヴァン月に、ネパール・マンダラのカシュタマンダバ・マハーナガラ、タラムーラ・マ
ハーヴィハーラの、パコ・プクリ・ディヤーマの東の家に住む、吉祥なること三度のヴァ
ジュラデーヴィーの信奉者、吉祥なるヴァジュラーチャールヤのラトナムニが、ラサの
ルブーシャーカ・パーラーに滞在していた時に発心して、自らが読誦するために、この
吉祥なること三度のヴァジュラヴァーラーヒー・カルパを書写した」(cf. 吉崎一美・田中
公明『ネパール仏教』1998, pp. 248-250)。

⑧ *Caṇḍamahāroṣaṇa tantrārāja* (2816 = DP 3613) Skt. - Nwl. 25.0 × 8.1cm Paper H. on b. ff. 106 (1b~106b, complete) and 1 extra folio 5 lines Fig. on 1a Takaoka CH 233 「ネワール暦
1011(?) 年 (月不明) に書写した。ネパール・マンダラのカシュタマンダバ・マハー
ナガラ、タラムーラ・マハーヴィハーラの、パコ・プクリ・ディヤーマに住む、吉祥
なるヴァジュラデーヴィーの信奉者、吉祥なるヴァジュラーチャールヤのラトナムニが、
ラサの地に滞在していた時に発心して、この吉祥なること三度のカラヴィーラ・タント
ラを書写した」。

⑨ *Vajravārāhi kalpa mahātantrārāja* (4215 = DP 3936) Skt. - Nwl. 35.5 × 9.8cm Paper H. on b. ff. 150 (1b~150b, complete) 7 lines Fig. on 1a Takaoka DH 311 「ネワール暦 1012 年ジェ
シュタ月、ネパール・マンダラのカシュタマンダバ・マハーナガラ、タラムーラ・マ
ハーヴィハーラの、パコ・プクリ・デヤーマの家に住む、吉祥なること三度のヴァジュ
ラデーヴィーの信奉者である、ヴァジュラーチャールヤのラトナムニが、ラサの地に滞
在していた時に (この經典を) 書写した。ネパール・マンダラ、カンティプル・マ
ハーナガラ、キールティプヌヤ・ヴァジュラダートウチャイトヤ・マハーヴィハーラに
住む、シャーキヤ比丘であるダーナヴィーラ・シンとチャイトラヴィーラ・シンの二人
が発心して、自らが日々読誦するために、ラサの地のクン・パーラーの家に滞在して
商売をしている時に、施主となって (この書を) 作った」(cf. 拙稿「カトマンズ盆地にお
けるマンダラの成立根拠としての〈壺〉」『印度学仏教学研究』46-1, 1997, p. [196])。

〈ラトナムニが書写した写本〉

(a) *Nakṣatra mālā* (4586 = DP 1301) Skt. Nwa. - Nwl. 18.5 × 8.5cm Paper TS. H. on a & b.

pp.30 (14 + 16, complete) 6 lines colophon : śubha // samvat 948 mti māgha śudi nhu 7 siddhayakā jura śubha [/] rekhaka dokha na diyate // ratnamuniṃ coyā jula śubhaṃ //

(b) Aparimitāyur nāma mahāyāna sūtra (4112 = DP 3191) Skt. - Nwl. 14.8 × 5.5cm Paper H. on b. ff.39 (1a~39a, complete) 4 lines Takaoka DH 149 colophon : ārya aparimitāyū nāma mahāyānaṃ sūtraṃ samāpta // // śubha svaṃta(samvat) 949 mti cait[r]a vadi 7 nhasa nhu siddhayakā jura [/] ratnamuni[ṃ] coyā jura // śubhaṃ // rekhaka doṣa na diyate // //

(c) [1] Durgati parīśodhanī nāma dhāraṇī [2] Śrī dharmalakṣmī saṃvāda (chap.1~6) (4320 = DP 3241) Skt. Nwa. - Nwl. 18.0 × 8.3cm Paper TS. H. on a & b. pp.73 (34 + 39, incomplete) 5 lines colophon : iti śrī dharmalakṣmī saṃvāde ṣaṣṭhamo'dhyāya // śubhaṃ // // samvat 967 miti māgha kṛṣṇa naomi anurādhānakṣatra dhruvayoga maṅgalavāla thva khunhu itilaṃnche hitigāle maitribodhisatvayā phuse maṇḍalaphaleṃ kvasa nāgarājā vijyāta [/] raktavarṇa śvetavarṇa nilavarṇa svamha nāgarājā oyāo cona ~ // // sa[ṃ]vat 967 miti māgha kṛṣṇayā aṣṭami thva kh[u]nlu ilāyalaṃncheyā ratnamuni ~

(d) Mahākāla tantra (4634 = DP 3283) Skt. - Nwl. 12.2 × 5.7cm Paper H. on b. ff.33 (1b ~ 34a, missing f.25) 4 lines colophon : iti śrī vajramahākāla[ta]ntra hṛdaya dhāraṇī samāpta // // ye dharmmā ~ [/] śubha s[am]vat 971 mti cait[r]a vadi 2 ninhusa roja 5 // śubhaṃ // rkhitaṃ ratnamuni jula śubhaṃ //

(e) [1] Dharma pāsaḥ [2] ūpāta śānti kriyā (0644 = DP 2249) Nwa. - Nwl. 15.9 × 10.0cm Paper TS. H on b. pp.58 (incomplete) 9 lines colophon : iti dharmapāsaḥ samāpta // // śubha saṃvatt (samvat) // 1000 // mti bhādrava kṛṣṇa saptami ṣunu siddhadhayakāo (siddhayakāo) biyā [/] mūla bāhālayā vaj[r]ācāya guru ratnamunina siṣya puna (pūrṇa) kṛṣṇayā dharmacitta [utpatti] juyāo thva saphūli dayakāo tayā [/] ~ (cf. Vaidya & Kamsakār, *op. cit.*, p.39)

これらのうち、(a) から (d) は単にラトナムニの書写と記すのみである。その筆跡はここで論じているラトナムニ・ヴァジュラーチャールヤのそれとよく似た印象を受けるが、同一人物と比定するには年代がやや早いようにも思われる。ネワール暦 900 年に Cajā saphū (2843 = DP 3531) を書写したラトナムニ・ヴァジュラーチャールヤは、明らかに別人であろう。(c) はその筆写者がラトナムニとは言いがたいが、そこに述べられているナーガラージャ出現の奇瑞は、⑥の竜王信仰と何らかの関連があるかもしれない。また (e)-[1] には、「ムーラ・パハのヴァジュラーチャールヤであるグルのラトナムニが、弟子のプールナ・クリシュナの宗教心が起きて（起きたので）、この書を作らせた」とある。このラトナムニがここでのラトナムニと同一人物であるとすれば、彼はネワール暦 1000 年にはネパー

(144) ラトナムニ・ヴァジュラーチャールヤがラサで書写したネワール仏教写本 (吉 崎)

ルにいたことになる。しかしヴァイディヤとカンサカルの前掲カタログは「ムーラ・バハ」を「ムー・バハ」と解釈する。ムー・バハ Mū Bahā (ムーラ・シュリー・マハーヴィハーラ Mūla Śrī Mahāvihāra) は、シカム・バハと同様に、カトマンズ市内の有力仏教寺院 (ムーラ・バハ) の一つである。またネワール暦 993 年 (ヴィクラム暦 1930 年) にはタンヒティ Tham(Ṭham)hiti (カトマンズ市の北地区にある) のクヴァー・バハ Kvā Bahā に住むトリラトナムニ・グバージュ Tri(Ṭri)ratnamuni Gu-bhāju (グバージュはヴァジュラーチャールヤに対するネワール語の尊称: グル・バージュの略とされる) という者が占いに関する Darśan phala(0626 = DP 948) を書写している。この者はヴィクラム暦 1929 年に Svasthāni kautuka nāṭaka (2534 = DP 1373) を書写し、ネワール暦 1002 年には Madālasopākhyāna nāṭaka (2531 = DP 1364) も書写している。

それに対して①と②は、シカム・バハ (タルムーラ・マハーヴィハーラ) のパコ・プクリに住む、ヴァジュラーチャールヤのラトナムニによる書写であることを明記している。しかしそこにはチベット滞在の記述が見られない。それでおそらく彼は②から③までのある時期にチベットに向かい、少なくともその後の十二年をラサで過ごしたのであろう。また④にはチベット滞在の記述が見えないが、「ネパールの」という表現がそれを示唆していると受け取れないこともない。あるいはこの時期に彼はネパールに一時帰国していたのかもしれない (それで前掲の未発表拙稿では、この写本をチベットでの書写經典に含めていない)。

チベットでの彼は交易商業に従事しながらも比丘と自称しつつ (③)、無上ユガ系のヴァジュラヴァーラーヒ・タントラを信奉し、自らのために (⑦)、あるいは信者のために (⑨)、それを書写した。カトマンズ時代の前半生で、彼はネワール密教儀礼の司祭僧としてのキャリアを積んでいた。ネワール仏教の儀礼マニュアル (①-[1]) の書写がそれを裏付けている。またラサ時代の彼は、④の以後に、ルブーシャーカ・パーラーに属する交易商人の立場から転じて、そのパーラーに専属の司祭僧になったらしい (拙稿「パーラー (チベットのネワール商人結社) のヴァジュラーチャールヤたち」『密教文化』掲載予定)。⑦には「ルブーシャーカ・パーラーに滞在していた」とのみあって、交易に携わったとは記されておらず、その一方で⑤以後には施主の依頼による經典の書写が目立ってくるからである。

〈キーワード〉 ネワール仏教写本, Lhasa, Asha Archives, Ratnamuni Vajrācārya

(東洋大学大学院修了)

its, probably carved between the 2nd and 3rd centuries in Mathurā, where the Sarvāstivāda school was influential.

71. The Newari Buddhist Manuscripts copied by Ratnamuni Vajrācārya in Lhasa, Tibet

Kazumi YOSHIZAKI

The Asha Archives (Asha Saphu Kuthi) in Nepal has a collection of Sanskrit and Newari manuscripts about 5,300 in number. In this collection, according to the colophons, I discovered 37 mss. commissioned by Newari traders or artisans who had lived in Tibet (Yoshizaki, “The Modern Newari Buddhist Manuscripts copied in Tibet — from the Collection of Asha Saphu Kuthi, Kathmandu, Nepal,” forthcoming). Of these mss., 6 or 7 mss. were copied by Ratnamuni Vajrācārya in Lhasa. In the first half of his life he was a priest of Sikhamu Bahā (Tarumūla Mahāvihāra) of Kathmandu, and he copied 2 mss. dated Newari Saṃvat 983 and 991. But in his later life, between Newari Saṃvat 991 and 1001, he proceeded to Lhasa to engage in the business of trade with Tibet. And at least for 12 years he stayed in Lhasa, keeping his habit of copying Buddhist mss. as in the Kathmandu days. Then it seems that later in Lhasa he changed his position from businessman to priest for the Newari merchants in Lhasa (Yoshizaki, “The Vajrācāryas in the Newari Merchant Associations in Tibet [Pālās],” forthcoming). He was one of the typical men who intended to maintain the Newari culture in Tibet.

72. The Traditions Related to the Parinibbāna of Sāriputta

Shōgo IWAI

In the Nikāyas and the Chinese Āgamas it is a fixed tradition that Sāriputta and Mahāmoggallāna, the two great disciples of Sakyamuni, entered parinibbāna earlier than their Teacher. But it is not clear how long before the Teacher’s parinibbāna this took place. For example, according to the Pali tradition, Sāriputta actually appears in the *Mahāparinibbānasuttanta*; therefore